

第 62 回リンドウ・ノーベル賞受賞者会議(物理学関連分野) 参加報告書

所属機関・部局・職名: 米国ラトガーズ大学 工学部 材料工学科 ポスドク

氏名: 山口 尚登

1. ノーベル賞受賞者の講演を聴いて、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。〔全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名(3名程度)を挙げ、記載してください。〕

自分が今後研究を進めるにあたって、特に参考になると感じた講演は以下の二人によるものだった。

[Douglas Osheroff]

彼は大学院生のときに、ノーベル賞の対象となった実験をおこなっていた。講演では、そのときのデータが記されている実験ノートが映し出され、非常に感動した。また彼の生い立ちを含め、どのような子供だったかを具体的に話してくれ、ノーベル賞の対象になった実験との関連付けが興味深かった。自分を理解し、自分が最も活きる研究をおこなうことが重要だと言っていたのが印象的だった。彼の講演を聞き、自分の苦手な部分に挑戦すると同時に、自分の得意分野をきちんと見極め、今後の研究戦略を立てることも重要である可能性があると感じた。

[Dan Shechtman]

彼の発見は、長年にわたりその分野の権威から猛反対を受け、受け入れられなかった。そのような状況でも自分の発見を信じ、最終的にノーベル賞受賞に至った彼の話は、現実味に溢れ、自分の中にすんなりと入ってきた。自分の経験から、研究は浮き沈みがあるものだと理解しているが、彼がどんなときでも沈まないことだと言っていたのが印象的だった。今後、研究がうまくいかないことがあったときに彼の言葉を思い出して前に進めたらと思う。



2. ノーベル賞受賞者とのディスカッション、インフォーマルな交流(食事、休憩時間やボート・トリップ等での交流)の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。[全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名(3名程度)を挙げ、記載してください。]

素晴らしい研究をおこなった人たちなので、人生研究一本という感じの受賞者も多いのかと思っていたが、それぞれの人生をきちんと楽しんでいるようだったのが印象的だった。研究に集中する時間もしくは期間が不可欠なのはもちろんだが、ただがむしゃらに時間だけを掛ければ良いというわけではなさそうだと感じた。ありきたりな表現になってしまうが、密度の濃い研究をおこない、メリハリをつけるのも重要なかもしれないと考えさせられた。

会議の午後のプログラムは、自分の希望するノーベル賞受賞者とのディスカッションセッションに参加するというものだったが、どの受賞者も若手研究者の質問が尽きるまで答え続けるという姿勢でセッションに臨んでいることに驚いた(終了時間を気にしない)。また、どの受賞者も丁寧にかつ真剣に我々若手研究者の質問に答えようという姿勢が感じられ、感銘を受けた。

インフォーマルな交流としては、受賞者と同じテーブルでディナーという機会があったが、自分のテーブルに座った受賞者は非常に気さくな感じで、いろいろと個人的に話し掛けてきてくれ、非常にありがたく、また楽しい時間を過ごさせてもらった(ハーバード大教授)。貴重な体験をさせてもらったと感じた。

また休憩時間にサインをもらいに行っても、どの受賞者も快く応えてくれた。

最終日のボート・トリップの帰りでは、受賞者たちが若手研究者に交じってポップミュージックに合わせて踊ってくれ、ノーベル受賞者たちを非常に身近に感じられる貴重な体験をさせてもらった。若者と一緒にダンスを踊るという受賞者たちの素顔な一面を目の当たりにし、当たり前といえば当たり前だが受賞者たちも同じ人間であると感じた。

3. 諸外国の参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。

諸外国の参加者との交流は主に食事中であった(朝、昼、夜)。あらゆる国の参加者と交流する機会があったが、出身国に関わらず、全体として若手研究者たちのもつ意欲の高さに感銘を受けた。そして、国の制度には違いあれど、考えていること、直面している問題等は共通している部分が多いと感じた。今回の会議で得た諸外国の参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流での経験は、今後、学会会議等でのネットワーク構築に活かしたいと考えている。

4. 日本からの参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。

自国からの参加者は、共有できる部分が他国の参加者と比べて多く、会議中を通して自分の所属する核グループとなる貴重な存在だった。他国からの参加者同様、皆、意識が高く、非常に刺激を受けた。また、人間的にも皆関わり易かった。会議中のディスカッション等の緊迫した時間帯の合間に日本からの参加者と関わることで和み、バランスをとることで会議を通してうまく集中力を持続できたように感じる。具体的に研究内容で近い参加者はいなかったが、これから自分の研究を確立していくという同じような状況を共有できる参加者が多く、今後も同世代の研究者として広い意味で関わっていきたいと考えている。

5. その他に、リンダウ会議への参加を通して得られた研究活動におけるメリット、具体的な研究交流の展望がもてた場合にはその予定等を記載すること。

特になし

6. リンダウ会議への参加を通して得られた以上の成果を今後どのように日本国内に還元できると思うか。

リンダウ会議で得られたものの主なものとして、「長期的な意味での高い志をもって研究に取り組む意欲」が挙げられる。リンダウ会議で得られた志と意欲を今後持続できれば、高い質の研究成果、またそれ以外にも研究で関わった人々とのやり取りを通してプラスの影響を与えられる可能性が十分にある。そういった場合に、日本の研究レベルの向上、また意欲の向上という面でリンダウ会議での経験を日本国内に還元することが可能であると考えます。



7. 今後、リンダウ会議に参加を希望する者へのアドバイスやメッセージがあれば記載すること。

会議に参加した若手研究者の代表が「我々若手研究者にとってまさにパラダイスのような一週間だった」と閉会式の挨拶で表現したが、全く同感である。自国を代表して参加し、自分の研究分野に近い 30 人ものノーベル受賞者との直接の関わる機会が与えられ、自分と同じような立場の各国の若手研究者との関わる機会が与えられる。リンダウ会議は通常の学術会議とは全く異なり、長期的視野に立って世界の若手研究者の育成を目的とした非常に特異な、そして我々若手研究者にとってはこの上ない機会を提供してくれる会議である。同世代の意識の高い自国の若手研究者を中心とし、世界の意欲ある若手研究者と交流し、ノーベル受賞者たちから学べるものは学び切るといった雰囲気が会議全体を包む。そしてありがたいことに、ノーベル受賞者たちは会議の意義に賛同し、期待に十二分に答えてくれる。我々若手研究者にとって、このような素晴らしい機会を与えてくれる会議に参加するチャンスを逃す手はない。